

第 19 回国際動脈硬化学会議 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会 議 名: (和文) 第 19 回国際動脈硬化学会議
(英文) The 19th International Symposium on Atherosclerosis
(ISA2021)
- (2) 報 告 者: 第 19 回国際動脈硬化学会議国内組織委員会 会長 佐藤 靖史
会長 山下 静也
- (3) 主 催: 一般社団法人 日本動脈硬化学会
日本学術会議
- (4) 開催期間: 2021 年 10 月 24 日(日)～27 日(水) [4 日間]
10 月 24 日(日)～11 月 30 日(火) *オンデマンド配信
- (5) 開催場所: 国立京都国際会館(京都府京都市)
- (6) 参加状況: 52 カ国・地域 948 人(国外 318 人、国内 630 人)

2 会議結果概要

(1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯:

ISA2021 は、国際動脈硬化学会(International Atherosclerosis Society)が 3 年ごとに開催する会議であり、1966 年の第 1 回から当会議で 19 回を数える国際会議である。国際動脈硬化学会は世界 65 カ国の構成学会より成り立っており会員は約 17,000 名にのぼる。

2015 年 5 月 23 日にオランダ・アムステルダムで開催された第 17 回国際動脈硬化学会議にて誘致プレゼンテーションを行い、日本・京都開催が決定した。これに伴い、国内の学会である第 53 回日本動脈硬化学会総会が本国際会議と同時に開催されることとなった。

(2) 会議開催の意義・成果:

日本における動脈硬化研究は世界的にも重要な役割を果たしており、日本がリーダーシップをとって国際動脈硬化学会を開催することで、世界各国が最先端の動脈硬化研究成果を共有し、研究を推進することができた。

さらに、国際動脈硬化学会前会長(Past-President)を日本動脈硬化学会名誉理事が務め、アジア太平洋州支部の支部長は第 19 回国際動脈硬化学会議の会長が務めており、超高齢化社会を迎えつつあるアジア太平洋州地域で国際動脈硬化学会を開催することで、各国が抱える課題の解決に向けた協力体制の強化や動脈硬化研究およびその治療水準の向上に寄与した。

(3) 当会議における主な議題(テーマ):

Toward Healthy Aging through Atherosclerosis Science
(動脈硬化を通して、健康長寿を実現する)

(4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割:

本国際会議を日本で開催したことにより、我が国における動脈硬化研究の重要性を全世界の研究者にアピールし、多くの研究者の参画を促す絶好の機会となった。我が国のこの分野の科学者が世界中の科学者と情報交換をし、活発な議論を行うことで動脈硬化研究に関する研究を一層発展させる契機となった。

また、若手奨励賞(Young Investigator's Award)を設定し、今後の動脈硬化学を担う若手の国際会議への参加を促進することに注力した。

行政との連携・学会との協調を通じて、我が国の健康づくりを推進するとともに、国民の福祉に貢献するため、市民公開講座を開催し、研究の成果報告、最新の知見・予防について市民啓発を行った。

(5) 次回会議への動き:

次回は2024年、第20回国際動脈硬化学会議(ISA2024)をオマーン(マスカット)にて開催することが決定している。ISA2021の閉会式にて、次回会議の会長より、挨拶並びに告知が行われた。

(6) 当会議開催中の模様:

2020年初旬より急速に世界に蔓延し、2021年以降も収束が見込めなかったCOVID-19の影響を鑑み、2021年1月、ISA2021は国際動脈硬化学会議としては、初となるハイブリッド形式での開催が組織委員会において決定された。

国際会議の意義の一つに、国内外の第一人者の講演を直接聴講できること、また質疑応答などを通して最新の情報を入手することがあげられるが、2021年10月の時点では入国規制が緩和されず、残念ながら海外からの招聘者の来日は叶わなかった。

一方、すべてのセッションでライブ発表・配信を可能にすることで、会場での参加者は直接、発表者と議論を交わすことができる環境を整えた。また、オンラインの参加者も家や職場にいながリアルタイムで発表を視聴し、チャット等にて質疑に参加することができた。

リモートで参加する座長・演者の所在は世界各国に及ぶため、それぞれの時差を配慮し、朝は7時30分から、夜は20時までセッションを構成し、より多くの国・地域よりリアルタイムでの参加を可能にした。

なお、本会議ではジェンダーに配慮したプログラムの構成を行い、プレナリーレクチャーやシンポジウム等の指定演題では女性研究者の占める比率が約4割を超えた。これは国際動脈硬化学会議の歴史の中でも高水準であった。

また、会期後にはオンデマンド配信を実施したことにより、同一時刻に実施されたセッションも後日閲覧可能となり、現地会場でセッションを聴講していた参加者からも好評であった。

開催地の京都では、緊急事態宣言は緩和されたもののCOVID-19の感染拡大を防ぐため、感染症対策を徹底して行うことで安心・安全な会議開催を遂行した。

本会議において、現地開催及びオンライン開催の両方の観点からコロナ禍における国際会議の開催の在り方の一例を示すことができたと考ええる。

なお会期中には、下記のプログラムを実施した(カッコ内記載がある場合はセッション数)。

オープニングセレモニー、プレナリーレクチャー(1)、スペシャルセッション(1)、プレナリーシンポジウム(7)、シンポジウム(35)、ジョイントシンポジウム(5)、スポンサードシンポジウム(2)、受賞講演(2)、一般演題(モデレーテッドセッション(5)、ポスターセッション)、YIA 受賞講演、ランチョンセミナー、クロージングセレモニー、市民公開講座

- (7) その他特筆すべき事項: (他国との招致競争等、日本開催にあたり努力した事項 等)

2015 年 5 月 23 日にオランダ・アムステルダムで開催された第 17 回国際動脈硬化学会にて誘致活動を行った。オマーン、チェコ、ロシアが同じく誘致に立候補し、それぞれプレゼンテーションを行った。

最終的に我が国の国際動脈硬化学会における役割の大きさと、日本の安全性、経済性、観光資源の魅力度のアピールが評価され、日本開催が決定した。

3 市民公開講座結果概要

- (1) 開催日時: 2021 年 10 月 23 日(土)～11 月 30 日(火)

- (2) 開催場所: オンライン開催

- (3) 主テーマ: ポストコロナの生活習慣病対策

サブテーマ:「ポストコロナ、改めて見直したいメタボ予防」

「高齢者診療・フレイル予防の視点から ～コロナフレイルの怖さ～」

「COVID-19 と心臓病」

- (4) 参加者数、参加者の構成: 570 名(動画視聴数) 一般、学会参加医師、メディカルスタッフ

- (5) 開催の意義:

動脈硬化は超高齢化社会を迎える我が国にとって大きな問題であり、社会全体として健康づくりを推進することが重要である。コロナ禍は改めて生活習慣病を見直す機会となり、最新の知見や予防について市民啓発を行うことは国民の福祉に貢献になるものと考え、公開講座を開催した。

- (6) 社会に対する還元効果とその成果:

高齢化が進む中で特に問題となる動脈硬化の予防や治療の進歩についてポストコロナにおける観点から広く周知し、健康維持に寄与することができた。

- (7) その他: プログラム内容詳細

開会挨拶

第 53 回日本動脈硬化学会総会 会長 荒井 秀典

(国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 理事長)

講演 1. ポストコロナ、改めて見直したいメタボ予防

野口 緑(国立大学法人大阪大学 大学院医学系研究科)

講演 2. 高齢者診療・フレイル予防の視点から ～コロナフレイルの怖さ～

飯島 勝矢(東京大学高齢社会総合研究機構/未来ビジョン研究センター)

講演 3. COVID-19 と心臓病

野出 孝一(佐賀大学医学部循環器内科)

閉会挨拶

第 19 回国際動脈硬化学会議 会長 山下 静也(りんくう総合医療センター)

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議と本国際会議との共同主催により、開会式で岸田文雄内閣総理大臣よりメッセージを賜り、各国からの(視聴)参加者に対して、日本における動脈硬化関連疾患の注目度の高さを広く認知させ

るとともに、世界における動脈硬化関連疾患の研究における日本のプレゼンスを一層高めることができた。

また、本学議に会場費の援助を受けられたことは、ハイブリッド開催における現地開催運営費を抑え、オンラインで参加する国内外の参加者にも充実したコンテンツの提供をすることにもつながり、世界からの参加者に向け優れた研究発表を共有し、一丸となって課題に取り組むための環境づくりにも貢献することができた。

